+博論書式 3（論博書式 3）

平成 30 年 12 月 26 日

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分　　野	リハビリテーション学分野
学籍番号	16S3021	院生氏名	近藤　智
通学キャンパス	東京赤坂キャンパス		
論　文　題　目	片麻痺に対する病態失認の損傷部位と発現機序との関連 －体性感覚障害と半側空間無視のどちらも伴わない片麻痺に対する病態失認例に着目して－		
審査結果（枠で囲む）	合格　　不合格		

＜審査結果の要旨＞

1. 研究の概要

1) **目的**：片麻痺に対する病態失認（AHP）は、知的機能は保たれているにもかかわらず、病巣と反対側の上下肢の麻痺に気づかない、あるいは言語で否認をする症状である。AHP の発現仮説は、体性感覚障害や半側空間無視（USN）に関連するものが多いが、両者の関連を支持しないものもある。本研究の目的は、AHP を認める文献例と自験例を、体性感覚障害と USN の有無から分類し、発現機序を検討することである。

2) **方法**：対象は AHP を認める文献例 76 例と自験例 1 例である。対象を体性感覚障害と USN の両方あり（SU 群）、体性感覚障害のみ（S 群）、USN のみ（U 群）、体性感覚障害、USN のどちらも伴わない（NSU 群）に分類し、各群の損傷部位を比較した。

3) **結果・考察**：NSU 群は、背外側前頭前野（DLPFC）と被殻・淡蒼球に損傷を認めた。DLPFC は自己モニター、被殻・淡蒼球は動作選択と関連し、両領域を結ぶ「連合系ループの機能低下」が NSU 群の発現要因であると考えられた。SU 群、S 群、U 群の一部症例も NSU 群と類似の病巣を示す点、体性感覚障害や USN のみで説明困難な例も認める点から、この 2 要因に起因する機序だけでなく、「連合系ループの機能低下」を基盤として、AHP が出現する可能性があると考えられた。

4) **結論**：NSU 群の AHP 発現の関連領域は DLFPC と被殻・淡蒼球である。両者で構成される連合系ループの機能低下に伴う自己モニターと動作選択の障害が相互に影響し、AHP が出現する可能性がある。

2. 研究方法、論証、論文形式

研究方法は倫理的に問題ない。論理性、形式とも適切である。

3. 知見の新規性と価値

本研究の新規性は、片麻痺に対する病態失認の発現機序に新たな知見を加えたことである。高次脳機能障害学の発展に貢献する研究として評価できる。

4. 審査経過・口頭試問

審査会は 1 回開催し、初回審査で論文審査と口頭発表を実施し、論文修正を求めたところ適切に修正された。口頭試問においては適切な応答がなされた。

5. 合否

以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が著者に博士（保健医療学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。

論文審査担当者	主 査　阿部 晶子 副 査　川平 和美 副 査　渡邊観世子